平和構築をめざす コミュニティ・ガーデンの取り組み

ダボリン・ブルタノビッチ ＣＧＡディレクター
まとめ：大塚敦子

――経済学からコミュニティ・ガーデンへ

ボスニアは、世界で農業生産の成長が最も遅い５か国の一つで、ヨーロッパでは最低の農業成長率です。戦争終結から11年経ついまも、ボスニアにはまだ農業省さえありません。一つの国境の内側に二つの政体を抱えていて、何も決まらないからです。「デイトン合意」は戦争は終わらせましたが、その後の国の将来については何ひとつ示しませんでした。現在のボスニアは、国というより、領土でしかないのです。

私はサラエボで生まれ育ち、大学では経済学を勉強しました。だから、農業についてはまったくと言っていいほど知りませんでした。戦争前は「野菜はマーケットで買うもの」と思っていました。しかし、サラエボが３年半包囲されている間は、水も食料も電気もなかったため、飢えに苦しむことになりました。そこで、窓辺に置いてあった花の鉢を移動して、代わりにトマトとピーマンを育てることにしました。そんな戦時中の経験から、コミュニティ・ガーデンへの関心が芽生えたのです。このプロジェクトに参加している人には、難民・国内避難民（自分が元いた町に戻れない人）・帰還者（戦争中他の町に避難していたが戻ってきた人）・身体障害者・精神障害者・退職者・失業者・若者・子ども・ロマの人びと（ジプシーとも呼ばれます）がいます。戦前の人口は約400万人でしたが、この紛争の目的が「民族浄化」だったため、約250万人が元いた場所に帰れない状況になっています。また、ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）の症状のある人が人口の80％もいる、といわれています。

――コミュニティ・ガーデン・プロジェクトの目標と活動

まず最初に、コミュニティ・ガーデン・プロジェクトの信念を言いますと、「過去のことは水に流し、いかなる偏見も持たない」ことです。この信念を基にプロジェクトで行なっているいくつかの具体的な活動を紹介しましょう。

①物質的支援：プロジェクトでは、１家族の成員１人当たりに50m²の土地を割り当てて、さまざまな野菜の種を支給しています。農機具を貸したり、農業に関する教育も行ないます。多くの人は、冬を越す食糧を備蓄するために、トマトやジャガイモを栽培します。その収穫物はガーデンの参加者たち自身のものになります。
②異なる民族同士の再交流をすすめる：私たちは、戦争中に大きな対立があった地域にコミュニティ・ガーデンをつくる計画を立てました。最初につくったのは、サラエボの郊外の激戦地だったところでした。

土地を見つけると、地元のそれぞれの民族のＮＧＯにコンタクトを取って、一つのガーデンに３民族が入るよう、参加者の構成を決定します。参加者は、最初のうちは自分の所属民族を主張していますが、２～３週間もすると、民族にかかわりなく、自分は「ガーデナーです」と言うようになっていきます。また、挨拶さえしなかった人どうしでも、一緒にコーヒーを飲む間柄になっていきます。
③教育：農業教育を行なうことによって、よりよい農作業のやり方や新しい食物を知る機会を提供します。たとえば、以前は、野菜といえばトマト・キャベツ・ジャガイモぐらいしか馴染みがなかった人びとが、いまではブロッコリーなども育てるようになりました。これまでは単に知らなかっただけで、ＣＧＡの教育によって、新しいものを受けいれることができるようになったのです。
④特別な支援を必要とする人びとのためのワークセラピー：これは、プロジェクトで、いまもっとも重要視していることです。ボスニアは失業率が高く、退職に近い年齢の人や、障害のある人の就職は困難な状況です。このワークセラピーは、そんな人びとに、自分にも何かできることがある、と誇りを感じられる貴重な機会を与えています。

――ガーデン・プロジェクトの歩み〈1999年～2006年〉

2000年にサラエボに最初のガーデンを設立したとき、16家族・75人が参加しました。ガーデンは現在15カ所に増え、330家族・2000人が参加しています。また、最初は5000m²だったガーデンの面積は、現在は合計で76000m²になっています。これらのガーデンのなかから、特徴的なものをいくつか紹介します。
①最初のガーデン――ストゥープ・ガーデン（サラエボ）：ここは、支援・教育センター（ガーデン・オフィス）がある私たちのメイン・ガーデンです。オフィス・倉庫・温室（400m²）・堆肥場・苗床・灌漑設備・道具・農機具などがあり、他のガーデンの人たちもここに来て教育を受けます。

このガーデンには、戦争中は敵どうしだった元兵士たちも参加していますが、いまではとても仲良くしています。彼らにとっては、ここが心を開いて話せる最初の場所だったのでしょう。また、ここでの農業教育は、かしこまってプレゼンテーションなどをするのではなく、みんなでコーヒーを飲み、庭で語り合いなが

らする形です。子どもたちも、鉢で野菜づくりを学んでいます。
②クラ・ガーデン（東サラエボ）：ここはスルプスカ共和国の側にあるガーデンで、刑務所の隣に位置しているため、受刑者の人たちとも一緒に作業をします。最初は、重犯罪の人と共同作業することに驚く人もいます。ここは、ボスニア初のオーガニック・ガーデンです。
③トゥズラ・ガーデン：このガーデンは、町の真ん中にあり、障害を持つシングルマザーのための農園として始まりました。最初は障害のある女性だけが参加していましたが、いまは健常者も一緒に働いています。
④ミシェヴィチ・ガーデン：ここは、「スレブレニツァの虐殺」で家族を失った女性のためのガーデンで、私たちのプロジェクトのなかで多民族構成になっていない、唯一のガーデンです。スレブレニツァの虐殺は、第二次世界大戦でのナチスの大虐殺以来、ヨーロッパで最悪の虐殺です。たった3日間で、8000人以上の男が殺され、10歳の少年でも、銃が持てると判断されたら殺されました。また、多くの女性がレイプされ、一カ月も森の中での逃亡生活を強いられたあげく、難民として全土に散り散りになってしまいました。そんな女性たちにとって、このガーデンは悪夢を忘れられるたった一つの場所となっていて、食物の確保のためという以上の大きな意味があります。彼女たちは、1日7～8時間もの間畑に出て、ひたすら農作業をするのです。
⑤ドボイ――“ナダ”ガーデン：ここは、精神障害者のためのセラピー・ガーデンです。ここのグループホームを最初に訪れたとき、入所者の人たちとまったくコミュニケーションが成り立ちませんでした。ある男性は、何も話さないし、いっさい誰ともコミュニケーションを取らず、まるで植物のような状態でした。その彼が、ガーデンで働くようになってから、めざましい変化をとげました。3年後に彼は「野菜を育てるには水が必要だ」と考え、自発的に粗大ゴミを探してきて、手製の灌漑システムを作ったのです。彼らの治療を担当するセラピストによると、ガーデンで作業するうちに、投薬量が大幅に減ったそうです。

――おわりに

コミュニティ・ガーデンのプロジェクトを始めてから7年が経ち、いまでは2000人以上が参加するまでになりました。ところが、このプロジェクトへの支援はすべて外国からのものなのです。ボスニア国内では、どの政党・政治家・省庁も興味を持ってくれません。ある市長は、単一民族の国を作るために戦争をしたのに、多民族のコミュニティ・ガーデンなどとんでもない、と言います。非常に残念なことですが、これがボスニア・ヘルツェゴビナの現状をよく示しているのでしょう。私たちは、世界中の人びとからの支援がこれからも続くことを信じ、願っています。

［Davorin Brdanovic］